



今も賑わいを醸す  
勝浦三町

勝浦三町江戸勝り——。

「勝浦の3つの町は、江戸にも勝る賑わいを見せている」という歌が古くから伝わるほど、威勢よく賑わった勝浦。三町とは勝浦市内の上本町・仲本町・下本町のことを指します。これらの地名は「小字（こあざ）」と呼ばれるもので、現在住所として表記されることはなくなりましたが、伝統的な呼び名として今も街の人々に親しまれています。

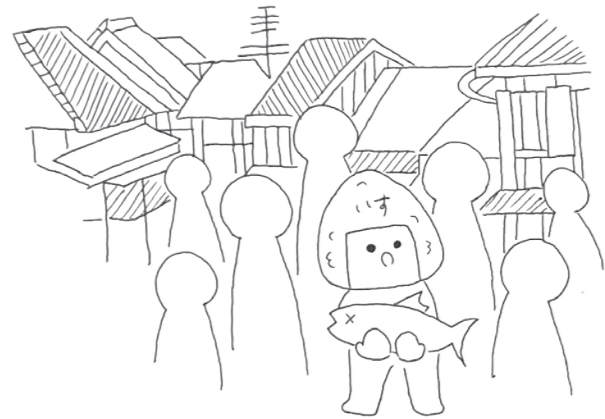
1591（天正19）年に始まった勝浦朝市は、この3つの町を順繰りに回って開催されていました。松の家は、下本町と上本町のちょうど中間辺り、江戸勝りの賑わいの真っ只中に位置し、江戸末期の創業以来この場所で旅館を営み続けています。

時代と共に歩んできた  
松の家の建物

現在の松の家の建物は、木造二階建てで昭和初期に建て替えられたもの。二階部分は階高が高く、通りに面して連なる腰窓には持出しの手すりが付いています。宿泊客は、窓際



松の家が面する「旧市役所通り」。昭和初期頃の様子。  
(写真：小林写真館 小林保)



当時は、左側が別館（現在の松の家本館の前身建物）で、右側に本館があった。



大正時代、本館前にて。右側が久恵さんの祖母で6代目女将の美与さん。左側の女性に抱っこされているのは久恵さんの父、博さん。

勝浦市勝浦 旅館松の家

旅人に、街の人々に

江戸時代から愛され続けた

「泊まれる文化財」

「登録有形文化財」という制度をご存知でしょうか。建設後50年を経過し、地域に親しまれている建物、時代の特色をよく表したものの、再び造ることができないものなど。そんな貴重な建造物を守り、地域の資産としてまちづくりや観光に活かしていこうと、1996（平成8）年に〈文化財登録制度〉が誕生しました。

勝浦市の市街地、約430年前から続く「勝浦朝市」が行われる通りのほど近くに、この文化財に登録された建物がそっと佇んでいます。

『旅館 松の家』。

江戸時代に創業し、約150年もの間、勝浦を訪れる旅行者たちの安息の場として歩み続けてきた旅館です。今回は、この「旅館 松の家（以下、松の家）」を営む渡辺幸男さんと、女将の渡辺久恵さんにお話を伺いました。



## 勝浦の街を、訪れる人々を見つめて150年

に腰かけて、朝市が立ち並ぶ様子を高みの見物か、はたまた通りにいる人に声をかけ喧噪の中に入り込んだか、そんな様子が思い浮かびます。

そして、建物を一番特徴付けているのは、一階の真ん中辺りに付く曲線の屋根。唐破風（からはふ）というもので、中央が弓のようにこんもり盛り上がり、両端が緩やかに下っています。皆さんもどこかで見たことがあるのではないのでしょうか？ 姫路城の大手守、銀座の歌舞伎座、銭湯、映画「千と千尋の神隠し」の油屋など、唐破風は装飾的に用いられ、建物を賑やかに印象付けています。

松の家の唐破風も通りに華やかさをもたらし、「ようこそ」と言わんばかりに、訪れる旅行者をおおらかに迎えています。

### 文化財だけど親しみやすい

初夏に取材に訪れると、七夕前ということ、玄関脇には宿泊客や近所の皆さんが吊るした色とりどりの短冊がさわさわと揺れていました。御影石の敷居をまたぐとハツとした

いきなりの女将業は、大変だったのでは？

久恵さん…そうですね。当時は、板前さんや番頭さんもいたので心配はありませんでしたが、両親に頼ることはできなくなっていました。この頃は車で来る人より、電車で来る人が多くて、駅に着いてから旅館を探す人が多かったですよ。勝浦駅は今のよう大きな駅じゃなくて平屋でした。

番頭さんは、お客さんの荷物を載せる荷台を付けた自転車で勝浦駅に行ったり来たりして、駅に到着した方に「松の家ですけど今日はどうですか？」と声をかけて旅館に連れていきます。

うちに限らず、その頃の旅館さんはみんな駅に迎えに行っていました。番頭さんはお客さんを見つけると「何人さん、今から行きますよ」と公衆電話から電話をかけてきて、板さんと私でお

のは、足もとに敷かれている暖色の一風変わった亀甲型タイル。まるで外の賑わいを、そのグラデーシオンで穏やかに受け入れているかのよう。見上げると、深い艶をもつケヤキの格天井が。

「登録有形文化財」というから、格式高く堅いイメージを描いていましたが、格式を踏まえつつもほどよくカジュアルで、親しみやすい雰囲気があります。そんな穏やかな空間の中、松の家八代目女将・渡辺久恵さんが、笑顔で私たちを出迎えてくれました。

### 女将さんに聞く

#### 勝浦と松の家の「あの頃」

松の家を継ぐまでは、どのような経緯があったのですか？

久恵さん…中学2年生くらいの頃、母が体調を崩したのをきっかけに、私も旅館の仕事に関わり始めました。やがて母が亡くなり、父も祖母も体が弱くなってしまっ、松の家をやる人がいなくなっちゃったんです。どこかで覚悟はしていましたが、妹たちはまだ小さかったこともあり、結局、高校生の時に私が引き継ぐということに。

迎への用意をするという形が多かったですね。

女将になるための修行はしたのですか？

久恵さん…祖母は、もともと最初から私に継がせようという考えがあったみたいです。だから私は小学校の上の方になるぐらいまで、日本舞踊をやったし、お琴もやったし、お三味（三味線）もやっていました。ほんと、いろいろなことやりましたね。あの当時は、芸者さんが座敷に上がりますので、女将もお客様に説明するのに多少は芸事を知らないといけないんですよ。

祖母から「女将っていうのは、一番になっちゃいけないよ」と聞かされて。私はそれがすごく響いたんです。

お客様の中にその芸事をやってる方がいた時、こちらが知っている、つい



旅館 松の家 女将  
渡辺 久恵さん  
Watanabe Hisae

昭和20年生まれ。勝浦市勝浦出身・在住。勝浦市内の小中学校、茂原高等学校を卒業。服部栄養専門学校にて調理師の資格を取得。現在は旅館松の家の8代目女将として旅館を切り盛りする。文字を書くことが趣味。好きが高じて書道師範の免許を取る腕前。



印半纏 (しるしばんてん)  
 上は現在の印半纏。下は、戦前の印半纏を羽織った当時の番頭さん。今は「こぼれ松葉」ですが、本来の家紋は「渡辺星に槍一本」。女将さんのお爺さんが、「槍は女性に合わない」「お祝いには合わない」と、新たに作られたとか。

「ンデー」って言いながら、アイスキャンデーやラムネを氷がいっぱい入ってる箱の中に入れて、それをおじさんが旗をぶら下げた自転車で引いて歩いたりとか。ほかにも風鈴屋さんや金魚屋さん、リアカーを引いてみんな売って歩いていました。

まだ紙芝居屋さんもあって、紙芝居が終わると駄菓子屋さんの飴をもらって、一生懸命お箸でぐりぐりぐりぐりやると白くなってくるの。それを食べるのが楽しみでね。

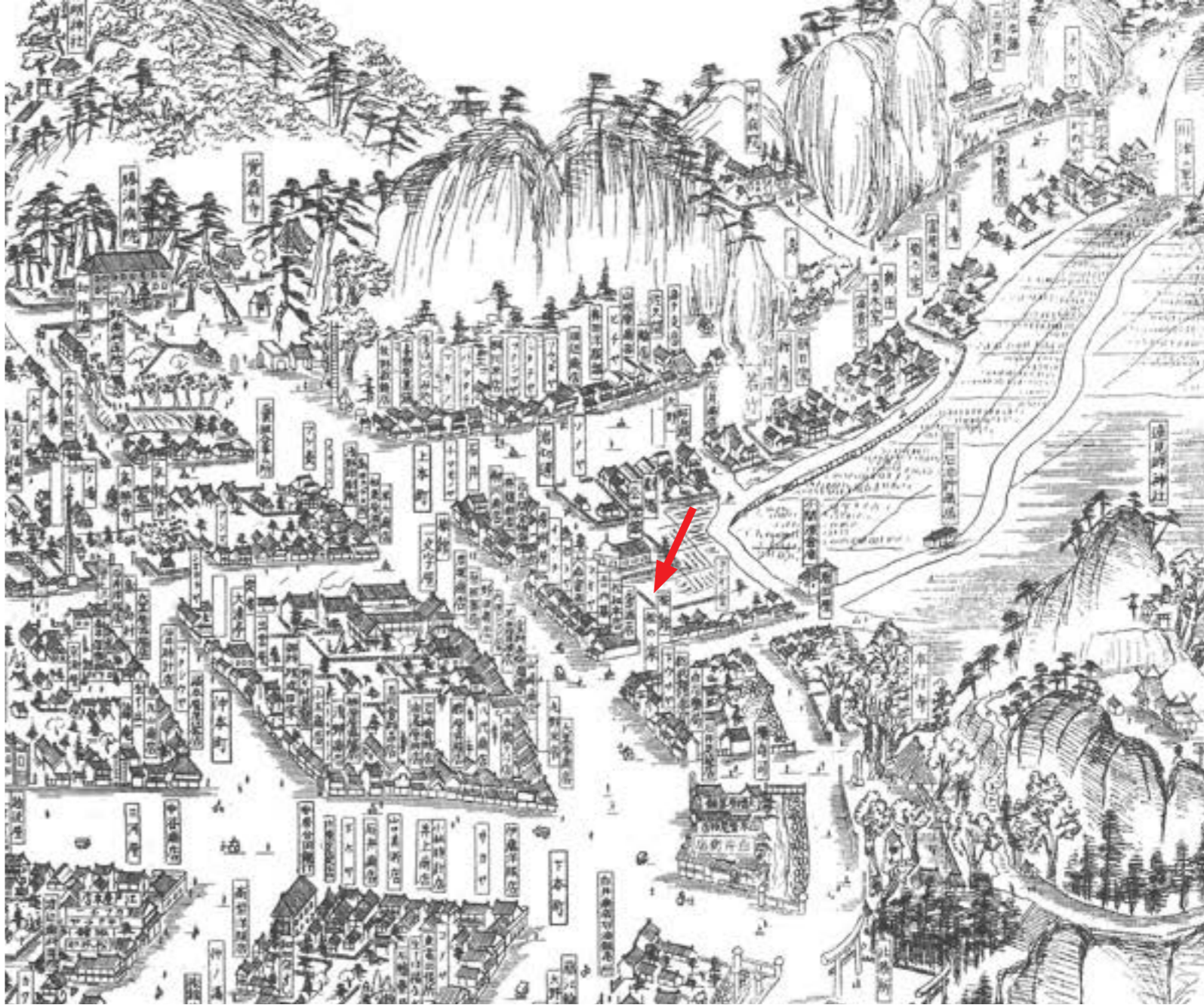
たいしておいしくもなかったんだろうけど、あの頃はすごいご馳走でした。ほかにも、染め物屋さんや佃煮屋さん、雑貨屋さんに大きい家具屋さんもありました。懐かしいですね。

—— 現在の建物は昭和初期のものと同じでした。建てられた棟梁は勝浦の方ですか？

**久恵さん**…本館は昭和初期に建て替えた部分が多いですが、長廊下の小屋組みとかは、明治期のままです。本館の建物を建てたのは主人のお爺さん。主人のひいお爺さんの代から松の家出入りの大工さんでした。大工さん、畳屋さん、左官屋さん、みんな松の家の印半纏(しるしばんてん)を着て、建物に携わってくれました。

—— 2003(平成15年)年に登録有形文化財になりましたが、その前

### 松の家、文化財になる



1928(昭和3)年、絵師・松井天山によって描かれた『千葉県勝浦鳥瞰図』。勝浦町の町筋はというと、図のほぼ中央に位置する上本町、仲本町と下本町の三町を中心に、商店が肩を寄せ合うように軒を連ねている。そして、上本町と下本町のちょうど中間辺りに『旅館 松の家』がある。突き当りの『勝浦病院』は、現在の『勝浦市立図書館』の場所。明治時代から「勝浦尋常高等小学校」→「勝浦病院」→「勝浦市役所庁舎」→「勝浦市立図書館」と、市民にとって重要な役割を担う施設が移り変わり存在してきた。そして、ここから延びる通りは、明治から現在まで変わらず、勝浦市街のメインストリートのひとつである。

から建物を維持しようと思われていたのですか？

**久恵さん**…実は建て替える予定もありませんでした。

**幸男さん**…登録の10年くらい前までは、「今風に……」なんて考えもありましたけど、旅館となると億単位の費用がかかるんですよ。それだけのお金をかけた建物がどれほどユニークでも、他の旅館さん、ホテルさんより何か目立つものをもてるか、ということを見ると、やっぱり今のままが逆にユニークっていうか、それを打ち出せるような気がして。

**久恵さん**…あと、うちは外からのお客様さんだけではなく、宴会や法事、結婚なども多くて。大切な行事のときは、祖母から習った昔からのしきたりがあり、場所などを変えられないものもありました。

お客様に対して上から目線になってしまふことがある。だから祖母は「2番になったらやめなさい。そのお習い事はやめて、2番でいい」と言いました。

—— 女将さんが見てきた勝浦の街の様子を教えてください。

**久恵さん**…昔は、朝市にたくさんの方が集まっていたんです。昭和30年代頃には、この辺りには牛車や馬車が行き交っていました。野菜とか魚を積んで、持ってきていたんです。

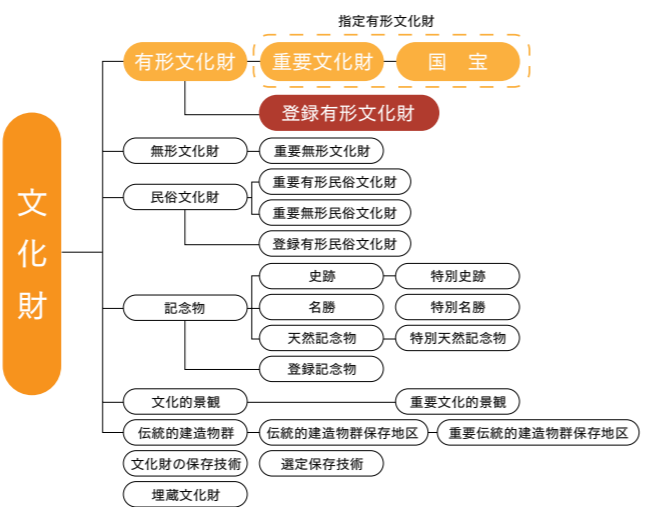
2階の部屋からお客さんが、通りがかりの魚を売っておばさんに浴衣の紐を垂らして「それ1匹くんよ」なんて言うんです。おばさんはその紐を魚の尻尾に結んで「いくらだよ」と言ううと、お客さんがお金をひよいとおばさんに投げて、物を買って帰るっていうこともありました。

うちの玄関の前なんかは、人がひとり入れるぐらいしか隙間がないほど、店がたくさん出ていたんです。楽しかったですよ。八百屋さん、着物の生地屋さんがあって、その隣は下駄を売っていたかな。

夕方になると、お友達のお婆ちゃんがおでん屋さんを出したり、お豆腐屋さんが回ってきたり、「キャンデー、キャンデー」って言いながら、人がひとり入れるぐらいしか隙間がないほど、店がたくさん出ていたんです。楽しかったですよ。八百屋さん、着物の生地屋さんがあって、その隣は下駄を売っていたかな。

## 主な文化財の種類

文化財には、さまざまなカテゴリがありますが、建造物における文化財は2種類。「重要文化財」や「国宝」のように文化財の中でも特に貴重で、現状のままの形で後世に受け継ぐことを目的とするものを『指定有形文化財』。それに対して、幅広く活用しながら受け継ぐことを目的としているのが、松の家も登録されている『登録有形文化財』です。





本館客室：床柱はカエデ、床框はクロガキ。鴨居は材種不明ですが、珠空（たまもく）といわれる丸い玉のような模様が散りばめられている木目。とても珍しく高価で、なかなか手に入らないもの。6代目女将（久恵さんの祖母）が棟梁や左官職人さんを引き連れて東京の木場、岐阜、長野、山形まで足を運び調達したという貴重な材が随所に使用されている。

—— 国の登録有形文化財となった経緯を教えてくださいませんか？

久恵さん…大学の先生や文化庁の方、県庁の方など、たくさんの方がいらっしやって、お部屋の中を見て行かれました。その後、市役所の方から「文化庁より国の登録有形文化財にしたいと連絡がありました。どうぞお願いしますか？」と言われまして、「お願いします」とお返事しました。それが

ら書類等の手続きを行って、登録を受ける際には文化庁の方からいろいろとお話がありました。「使われている木が良い。いろんな珍しい木が使われていて面白いです。」とおっしゃっていたのは覚えています。

幸男さん…たまたま長年旅館を営んでいて、ゆうに50年以上が経過している建物ということで「この年代のものを大事にして、できれば150年くら

いもって欲しい」という国の気持ちかな、と受け取りました。あちこちにありませんか、100年ぐらいの建物。でも、これからもどんどん年月が経っていきますからね。登録を受けてからも、もう20年経ちましたから。

—— 登録有形文化財になって、苦労されたことはありませんか？

幸男さん…「文化財の登録を受けちゃうと、建物に手を加えたらダメなんじゃないか」と、多くの人が思われるようですが、それは全然ないです。もし大掛かりな改修をするようだったら連絡をする、という程度です。手を入れる分には一向に構わないということでした。

久恵さん…古いものを残しつつ、壊れたところは直していく。その程度ならいいという形ですよ。ちなみに、修



有限会社 松の家 代表取締役  
渡辺 幸男 さん  
Watanabe Yukio

昭和18年生まれ。勝浦市勝浦出身・在住。立教大学英米文学科卒業。現在は旅館松の家社長。2015（平成27）年には、勝浦市内に桜を4千本植樹した「千本さくらの会」を発足し、会長を務めた。また、長年に渡り勝浦市観光協会会長として勝浦の観光業に貢献し、まちの活性化に尽力された。趣味は競馬と数字のパズルを解くこと。

繕費を国が補助してくださるといってもありません。

### 日本の文化をつなぐ

—— 登録有形文化財の建物に興味をもって訪れるお客様もいるのでは？

幸男さん…結構いらっしやいますよ。

久恵さん…雑誌やテレビが、その様に紹介して下さって、ありがたいですね。若い方が多くて、30、40代ぐらいの女性の方が多いかな。本館に泊まりたいという方が多いの。新しい方じゃなくて、こっちがいいっておっしゃってね。嬉しいですよ。応援して下さるお客さんもいて、「松の家を応援する会」というのをやって下さっていて。思い入れをもってくださる方がいらっしやるんです。

## 過去から受け継いでいくもの。今という時代に伝えていくこと

—— 古いものを残すということに対してどのように考えていますか？

久恵さん…古いものは残してほしいし、古くからある事も続くといいなと思うんだけど、残念ながらうちもなくなってしまう方に近づきつつあるように感じていて。でも、新しいものもいいかっていうと、そうとばかりは言えないような気がするんです。

今、世の中は、便利になってはいるけど、暮らし辛くなったかなという思いも私の中にはあって。勝浦もそうですけど、新しくすることや都会化していくことが本当に良いことなのか。その代わりに大切なものが失われていっているような気がして。昔のしきたりにしても、言葉にしても、それがなくなっていくってしまふのは、ちょっともったいないな、惜しいなって気がしますよね。

幸男さん…この建物のように、形であるものの古さというのはいくらも見えてわかるんですけども、お葬式

であったり、お祝い事であったり、そういう風俗・習慣というのはだんだん目に見えなくなって消えていってしまつて、それは寂しいですね。

ただ歴史の流れはそういうもんで、自分も江戸時代、明治時代の古き良きものと言われていたものは忘れちゃってるだろうし。令和の時代の今、昭和の出来事も古い昔になっちゃっています。今の時代に合うように変わっていくことと一緒に、古いけど大切にしたい文化や建物を大事に残していきたいですね。口伝えでも伝えていければいいです。

—— 大切なことを次の時代に伝えていくために、松の家で取り組んでいることはありますか？

久恵さん…「人間はお互い様っていう気持ちを持たないで」と主人がよく言うんですけど、私も本当にそうだと思うんですよ。

お客様がいらっしやってくださって、うちがお料理を出して、それに対応してくださるアルバイトのスタッフの方があります。みんなが楽しい思いをして、時には苦労しながら、それがだんだん

良くなっていく。やはり、助け合つて生きていかないといけないですね。そういった思いが少しでも伝われば、という思いでやっています。

この先、松の家はどれだけ続くかわからないし、なくなってしまうかもしれないけれど、頑張れる限りは頑張ってみますよ。



勝浦の町の歴史を見つめ続けてきた久恵さんと幸男さん。かつての楽しい思い出、大変だった思い出を懐かしそうに、ときに寂しそうに話してくれた。そして、お二人の記憶に刻まれた町の移り変わりを、今は若い人たちに伝えてくれている。

現在、松の家では10名ほどの大学生が従業員として働いている。2023年、勝浦にある国際武道大学を卒業した北崎匠さんは、その年の春から正社員に。支配人として積極的に旅館の運営に携わっている。

学生時代、コロナ禍にも関わらず女将さんとご主人にはたくさん気にかけてもらったという北崎さんは「今度は恩返しをしたい」と、歴史ある松の家を引き継ぐ担い手になった。

お二人が伝えてくださっている大切なことを胸に、若い彼らがきつと次の時代の『旅館松の家』をつくり、つないでくれるに違いない。